

平成 2 9 年度 第 2 回
北海道立総合博物館協議会

議 事 録

日時：平成 30 年 3 月 27 日（火） 13 時 30 分開会

場所：北海道博物館 講堂

平成29年度 第2回北海道立総合博物館協議会議事録

会議名	平成29年度 第2回北海道立総合博物館協議会
開催日時	平成30年3月27日（火） 13時30分～15時30分
開催場所	北海道博物館 講堂
出席委員数	6名出席（欠席1名）
傍聴者	0名

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

目 次

1	開会.....	1
2	館長あいさつ.....	1
	《資料確認》.....	1
	《出席状況確認》.....	1
	《協議会の公開について》.....	1
	《会長あいさつ》.....	2
3	議題	
	議題（1）北海道博物館 第1期中期目標・計画期 中間外部評価報告.....	2
	《中間外部評価報告書についての確認》.....	2
	議題（2）報告事項1 平成29年度 北海道博物館事業実績報告	
	（業務実績に関する内部評価報告）.....	3
	議題（3）報告事項2 平成30年度 北海道博物館年度計画.....	3
	《質疑応答1 国立アイヌ民族博物館との関係性》.....	3
	《質疑応答2 来館者数減少に対する評価》.....	5
	《質疑応答3 ガバナンスについて（1） 道民参加型組織》.....	6
	《質疑応答4 ガバナンスについて（2） 学芸職員の質の維持・向上》.....	6
	《意見1 積極的・具体的な広報戦略》.....	7
	《意見2 道民参加型組織の実施》.....	7
	《意見3 内部評価と年度計画の項目の対応》.....	8
	《質疑応答5 平成30年度事業の整理》.....	8
	《意見4 「平成30年度年度計画」の記述（1） 資料の収集》.....	9
	《意見5 「平成30年度年度計画」の記述（2） 資料環境の維持》.....	9
	《意見6 「平成30年度年度計画」の記述（3） 道民参加型の企画展示》.....	9
	《意見7 「平成30年度年度計画」の記述（4） 企画テーマ展》.....	9
	《意見8 「平成30年度年度計画」の記述（5） 調査研究の重点化》.....	10

《意見 9 「平成 30 年度年度計画」の記述（6） 普及事業の効果》.....	10
《意見 10 「平成 30 年度年度計画」の記述（7） 道民参加型組織》.....	10
《意見 11 「平成 30 年度年度計画」の記述（8） プロモーションビデオの活用》.....	10
《質疑応答 6 資料写真の提供について》.....	11
《質疑応答 7 レファレンスの内容とカウント方法》.....	11
《質疑応答 8 利用者数変動の分析》.....	12
《質疑応答 9 総合展示のリニューアル計画》.....	13
議題（4）報告事項 3 平成 30 年度 北海道立総合博物館協議会 スケジュール.....	13
4 その他.....	14
5 閉会.....	14

1 開会

右代学芸主幹：定刻より若干早いですが、第2回北海道立総合博物館協議会を開催させていただきます。本日の会議進行は右代が行います。それでは開催にあたりまして、館長・石森よりご挨拶を申し上げます。

2 館長あいさつ

石森館長：皆様、こんにちは。本日は年度末の非常にお忙しいなかを、お時間をおつくりいただきまして、博物館協議会にご参集たまわりましたことを厚く御礼申し上げます。北海道博物館も、この4月から4年目を迎えるところでございます。北海道立総合博物館協議会も、今年、3年目が終わろうとしているところでございます。今年度は中間外部評価をお願いいたしまして、本当にお忙しいなか、詳細に、さまざまな形で評価をいただきましたことを、たいへんありがたく思っております。評価を単に積んでおくだけでは、もちろん、意味がございませんので、皆様方から、様々な形でいただきました外部評価につきましては、これをできるだけ早く活かせる体制を取りまして、4年目の北海道博物館に入っていきたいと思っております。新年度は、「北海道命名150年」で、北海道博物館は特別展で松浦武四郎を取り上げる予定でありますし、高橋はるみ知事も「北海道150年」事業に対して非常に力を入れていただいているところでございます。本日のご審議を、よろしくお願いをいたしまして、また、今後ともよろしくご指導をたまわりますようお願いをいたしまして、私の開会のご挨拶とさせていただきます。本日、何卒よろしくお願いいたします。

《資料確認》

右代学芸主幹：それでは、配布資料の確認をさせていただきます。

〈以下、配布資料について確認〉

右代学芸主幹：乱丁などあれば、事務局に言っていただければ、取り替えますので、よろしくをお願いいたします。

《出席状況確認》

右代学芸主幹：出席状況ですが、今回は、湯浅委員が欠席ですが委員総数7名のうち6名が出席されております。協議会の開催条件であります、委員総数の2分の1以上が出席されており、今回の協議会については、開催条件を満たしていることを確認いたしましたので、ご報告いたします。

《協議会の公開について》

右代学芸主幹：協議会の公開でございますが、道の公開条例の規則によって、公開となっております。傍聴席を設けておりますので、傍聴されるかたが来る可能性がありますので、ご

了解いただければと思います。

それでは、議事進行を大原会長にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

《会長あいさつ》

大原会長：大原でございます。開会にあたり、ひとことご挨拶を申し上げます。皆様、お忙しいなか、お集まりいただきありがとうございます。この協議会も3年目で、外部評価報告書の中間のものが、今日の協議会でまとまる予定でございます。この外部評価の在り方、やり方・方法を皆様にご検討いただきまして、中間のところにまでたどり着いたということでございます。「折り返し地点まで、やっときた」という形で、いろいろなご意見・ご協力をいただきましてありがとうございます。さらに中間の折り返し地点でございますので、この外部評価をさらに2年間博物館でご検討されて、それをもとに活動されることになると思います。さらに2年後には、5年間の第1期中期目標・計画期の最終外部評価報告書を私たちが作成することになりますので、活発なご意見と、いろいろな形でのご協力をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。最後に、議事の円滑な進行にご協力をお願いいたします。簡単ですが、ご挨拶とさせていただきます。

3 議題

大原会長：それでは、本日の主な議題は、お手元の次第にありますように、「北海道博物館 第1期中間目標・計画期 中間外部報告書」、それから「平成29年度 北海道博物館 事業実績報告」と「平成30年度 北海道博物館年度計画報告」の3点です。協議会の終了時間は、おおむね15時30分を予定しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

議題（1）北海道博物館 第1期中期目標・計画期 中間外部評価報告

大原会長：それでは、早速議事に入ります。議題1です。1つめは、「北海道博物館第1期中間目標・計画期 中間外部評価報告」です。こちらは、平成29年9月に開催されました、第1回北海道立総合博物館協議会で、平成27年・28年度の内部評価について行った、外部評価の報告であります。この中間外部評価報告書は、会長一任でとりまとめるということで、委員の皆様からご了承をいただいておりますので、私からその概要を報告させていただきます。「中間外部評価報告書」をご覧ください。

〈以下、「中間外部評価報告書」にしたがって、内容を報告〉

《中間外部評価報告書についての確認》

大原会長：それでは、皆様方から何かご意見がございましたら、よろしくお願いいたします。

佐々木委員：1点だけ、少し形式的なところなのですが、3ページの「総括評価」の「総評」で、総括評価番号の1から9まで、個別に言及されておりますが、総括評価番号6に関する

言及がないのですが、これは何か理由があるのでしょうか？ 6番「道民の知的興味に応える博物館づくりへの措置」ですが、これは他の番号と一緒にして言及されてしまったのでしょうか？

大原会長：評価が「B」となっているものですね。私のほうでまとめるときに抜けてしまったのかもしれませんが。まとめのなかにも6番の内容は含まれる内容ですので、恐縮ですがけれども、「総評」の2つめのセクションに、この総括評価番号6を入れていただきたいと思います。他にございませんでしょうか？

よろしいでしょうか。特にご意見がなければ、これを「北海道博物館 第1期中間目標・計画期 中間外部評価報告」として、知事への報告書とさせていただきます。よろしいでしょうか。

全委員：承認。

大原会長：ありがとうございます。それでは、ご承認をいただきましたので、石森館長に報告書をお渡しいたします。

〈報告書が大原会長から石森館長に手交される〉

石森館長：皆様、ありがとうございました。

議題（2）報告事項1 平成29年度 北海道博物館事業実績報告（業務実績に関する内部評価報告）

議題（3）報告事項2 平成30年度 北海道博物館年度計画

大原会長：それでは、議題2・議題3に移ります。報告事項1「平成29年度 北海道博物館事業実績報告」、報告事項2「平成30年度 北海道博物館年度計画報告」について、一括して事務局から説明をお願いいたします。質疑応答等は、最後にまとめて行いたいと思います。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：それでは、資料2と3に沿って進めさせていただきますが、平成30年度計画について、概要をご説明させていただければと思います。それでは、舟山学芸部長、川田総務部長、小川アイヌ民族文化研究センター長よりそれぞれご報告いたしますので、よろしくお願いいたします。

〈以下、事務局より、資料2に沿って、内部評価の実施方法ならびに平成29年度 北海道博物館事業実績報告について、また、資料3に沿って平成30年度北海道博物館年度計画について報告する〉

大原会長：ありがとうございます。ただ今の内部評価報告、年度計画報告について、皆様からご意見・ご質問をお願いいたします。

〈質疑応答1 国立アイヌ民族博物館との関係性〉

宇佐美委員：アイヌ民族関係のことで、基本的なことを質問したいのですが、白老にできる

国立博物館と北海道博物館との関係を、一般の方に何がどう違うのか、北海道博物館の役割・国立博物館の役割をわかりやすく説明していただきたいです。それから、予算の説明がありましたけれど、具体的な連携という点の説明が詳しく書かれていませんが、連携していくべきだと思うのですけれども、国立と道立なので大変かもしれませんけれど、どのようなことを考えていらっしゃるのかを、お聞きしたいです。

小川センター長：確かに、お客様から「どうするの?」「どう違うの?」など、たくさん聞かれます。私どもでお答えしているのは、基本的な大きな目標として、「アイヌ民族文化の普及や継承に努めます」あるいは、「アイヌ民族文化に関する理解の促進に努めます」という大きな目標は、おそらく両者ともに変わりません。ただ、そういう意味では、さまざまな文化や歴史に関する博物館や展示施設のなかには、いわゆる「日本の歴史」や「文化」でも市町村立から国立まであるのと同じように、アイヌ文化についても北海道の取組として行うもの、国の取組として行うものができるということだと考えております。このように、「大きな目標としては同じだ」とお伝えしたうえで、それぞれ性格が違ふとすれば、こちらは北海道の総合博物館ですので、北海道の自然・歴史・文化をお伝えするなかで、そこで欠かせないアイヌの歴史や文化についてきちんと伝えること、「北海道を理解することのために、アイヌの歴史と文化の理解が必要だ」というコンセプトを持っていることだと考えています。国立博物館は、そういう意味では「アイヌ民族博物館」に特化し、おそらく展示の中身では、アイヌ民族そのものを中心に置き、そこに関わる存在としての本州以南の人びとの歴史、あるいは周辺の諸民族、あるいは海外の先住民族を対象に置いていくことになるので、「北海道」に軸を置いて、そのなかで、大変大きな、欠かせないものとしてのアイヌ民族文化を取り上げる形になるのか、アイヌ民族文化そのものを中心に置いて、そこに関わるものをいろいろな形で見ていくことになるのかというところで、国立博物館と私どもとでは展示のつくりが違ってくる、お客様にはお答えしております。

相互の連携については、国立博物館の体制が、今年度の後半にある程度固まってきたところで、いま、国立博物館が、国立博物館を中心としたネットワークのための準備会を開いてくださっております。そこに私どもも参加させていただいて、どういった形の連携の在り方が望ましいかを、議論をしております。たとえば、国立博物館のPR展示を道内の博物館が協力して実施していく。将来的には資料の貸出・相互貸出を、単に資料の貸出をするだけではなく、資料を貸し出すことをつうじてお互いの資料のデータの蓄積や共有を進める。あるいは、資料の保存や修復という課題もありますけれども、単独の市町村ではなかなか手に負えないもの、あるいは市町村の学芸員だけではなかなか情報がつかめないものについて、国立と道立で連携をしてそのような資料を調べていくことで、その資料についての情報を広く、市町村も含めて、共有し深めることができるようになれば、と考えています。以上です。

佐々木委員：この問題は、非常に重要な問題ですので、国立博物館の立場で補足をします。やはり相互協力は進めていきたいと考えております。ネットワークだけではなく、たとえば2館間の協定を結んでの、あるテーマに特化した共同研究や、共同展示も想定しています。

幸い、開館前のPRを含めた2つの組織が協力した展示をやっという動きもありますので、そういうことには積極的に参加させていただいて、北海道博物館の協力のもとに、いろいろPRをさせてもらえればと考えております。それから研究に関しましても、先ほど小川学芸副館長が仰ったように、ただ単に資料の相互貸借に留まらず、資料がもついろいろな情報、あるいはそれを研究という形で進めて、その研究成果を共有し合って、連名で公表するという形で進めたい。北海道博物館にもいろいろ設備はありますけれども、国立博物館ではなるべく最新の研究機器をそろえて、国立がもつ資料だけではなく、全国・北海道の市町村を含めまして、持っている資料の保存・修復・研究・調査などで貢献できないかと考えております。我々も「国ならではの」できることを考えております。正直に言いまして、我々の博物館は小さい博物館です。収蔵庫は小さいです。逆に言うと、資料は、地方の博物館で持っていていただく。我々はそれを共同利用なり何なりの形で利用させていただいて、国立博物館の施設や人材を使って、出てきた成果をお互いに共有しあうという形の、いわゆる連携したネットワーク博物館のようなものを目指していくことを考えています。北海道博物館は非常に歴史がありますので、ノウハウをいろいろ教わりながら、相互交換していければと考えています。

宇佐美委員：ありがとうございます。そうすると、今後、今のような点を盛り込んで、この事業計画に具体案をさらに盛り込まれていくことになるかと理解して良いですね？

小川センター長：特に、次の5ヶ年計画は、確実にそうなっていくと考えています。

宇佐美委員：ありがとうございます。

《質疑応答2 来館者数減少に対する評価》

竹垣委員：全体的なことでお聞きしたいのですが、そもそも、この内部評価の立て付けというのは、「総括の総括」とも言えるのが「総括評価番号1」で、「2」から「8」がそれに対する施策や重要な教育であり、最後の「総括評価番号9」が、それらが機能しているかどうかというガバナンスと私は理解しています。そういう意味でいうと、3つあって、1つは、利用者数です。減っていることに対して、評価基準は「A」をつけているので、満足されていると思うのですが、本当にそれでいいと思っているのか。思っていないとするならば、この原因がどこにあるかと思っているのか、ということが、1つめです。

舟山学芸部長：入場者数につきましては、リニューアル初年度、平成27年度に約15万人、翌年11万人、今年8万人前後という流れで来ておりまして、その評価設定の仕方自体にご意見いただいていることは、認識しているところでございます。これについては、平成29年度は、「11万人を維持する」目標値を設定させていただきましたが、入場者数の減少傾向に歯止めがかけられなかったという実態で、その点におきましては、項目別評価はB評価としました。けれども、その他、博物館の基盤的な活動としての資料収集や、その資料を活用した企画展の実施と、開拓の村のインバウンド交流施設整備事業などを総体的に評価して、この入場者数が含まれている項目は、A評価としました。あくまでも、その利用者数につき

ましてはB評価としたのですけれども、総括評価項目1・2の総体的な評価として、このような形になった次第でございます。

竹垣委員：ということは、北海道博物館は、そういう努力をマンアワーで評価されるということですか？ マンアワーをいくら使っても、結果が出てきたら、それはA評価になるのですか？ そういうことを言っているのですよ。もう少し言うと、今言われたように「目標設定に問題がある」とは、私は思っていない。結果に問題があると思っています。それにアグリーなのか、アグリーでないのか、それから聞いていきたいです。

舟山学芸部長：利用者数につきましては、目標値は低い設定になってございますけれども、改善点は、いくつか考えてございます。リニューアル時に「常設展」ではなく、「総合展示」と名称を変えた理由の大きなところは、総合展示内におきまして、クローズアップ展示のように、資料の入替をしてお客様に新しい展示を示して、リピーターを誘う博物館を目指したからです。けれども、それがここ3年は、意外と評価されていない。広報体制にもよるのですけれども、そのあたりを改善すべく考えて、クローズアップの一斉入替や、その広報に向けた案内を増やし、継続していきたいと考えております。展示につきましても、これまでの展示替えを検証しているところです。資料の保存のために資料を替えているところもございまして、そのようなところは、逆に目新しさは出なかったのかなというところです。目新しさのある、資料の展示替えはどういうものなのかを具体的に考えて進めていきたいと考えております。

《質疑応答3 ガバナンスについて（1） 道民参加型組織》

竹垣委員：要は、道民の支持を得たかどうか、入場者数に現われるのだと思うのですけれども、それを支えるものが何かというと、1つはミュージアム・エドゥケーター、学芸員と言い換えてもいいのでしょうかけれども、その質の維持・向上。2つめが、それを支える人たち。こちらで言うところの、道民による組織づくりです。この2本立てだと思うのです。では、この2本立てが十分成果があるかと言ったら、とても目標に達しているとは言い難い。道民参加型組織を、この3年間「つくる」と言いながらできていない。ふつう、民間企業だったら、責任者は処分されますよ。そういうことを、ガバナンスの立場から、何かやっているのですか？

小川学芸副館長：道民支援組織については、実は午前中も館内の会議で話題になりまして、来年度、確実にスタートさせるということになったところです。

竹垣委員：では、(道民)参加型組織については、「今年、必ずやります」ということですね。

《質疑応答4 ガバナンスについて（2） 学芸職員の質の維持・向上》

竹垣委員：研究紀要などを、毎年、拝見しているのですけれども、執筆者の名前はほぼ固定されています。研究職20何人のうち、4年間、論文も書いたことがない、学会にも行ったことがない、レポートも書いたことがない、そういう方が何人いるのか、これは人数を聞いた

いです。そして、ガバナンスとして、そういう方に対して、指導をされているのか。つまり、この博物館が機能しているかどうか、総括を含めて聞きたいのです。そこをよろしく願います。

小川研究部長：研究紀要などを例に、「学芸員・研究職員が30人いて何をやっているのだ」ということだと思います。内々に、30人それぞれの職員が「研究紀要で書いたか」「講座をやったか」「それ以外に、何か展示について、ある中心的な役割を担ったか」ということを、それぞれ見えています。該当数に差はありますが、4年間何もしていない職員が出ないようには目を配って、あるいは展示その他の企画を担当するような作業をしております。引き続き、そここのところの目配りや、実際の事業の立て方を意識して、ある種のマンパワーと言いますか、人材をいろいろな事業に活かせるようにしていきたいと考えております。

竹垣委員：研究者については、しっかり指導されている、ということですね？

小川研究部長：引き続き指導するということです。

竹垣委員：ちなみに、研究者の平均年齢は、おいくつくらいですか？

小川研究部長：きちんと出したことはないですけど、40代の後半に少し入っていると思います。

竹垣委員：まだまだ勉強ができる年ではありませんか。心配しているのですよ。この調子では、どんどん減るのではないかと思って。先ほど、「目新しさが無い」とおっしゃいましたが、やはり「時代を見て、展示を変えていく」というのは、研究者の技量だと思いますので。そこで評価していただくような計画にさせていただくことを望みます。

《意見1 積極的・具体的な広報戦略》

宇佐美委員：「広報体制の充実」については去年も指摘して、もっと積極的にやったほうが良いと、私もその都度言っています。今回も「戦略的にやる」と書いてありますが、具体的にどうやるかを提示していかないと、同じことになってくると思います。だから、今までやっていないことをやってみる。せっかくいいことをやっても、知らないとお客様は来ないですから。ましてや、中心部からこれほど遠いわけですからね。だから、「行ってみよう」と思わせるための広報が必要で、今のテレビのワイドショーでも何でもいいです。「どさんこワイド」などに「1分間コーナー」とかありますでしょ。そういうところに出て行くなどして、届かないところに届けることをもっと工夫してやっていかないと、もったいないと思います。「いろんなことを、こんなにいっぱいやっているんだ」とわかったら来ますよ。そのところを、もう少し工夫して、具体的に変えていくことを是非やっていただきたいと思います。

《意見2 道民参加型組織の実施》

宇佐美委員：道民参加型組織も「今年必ずやります」と、この年度計画に書いてありますが、毎年そうです。今年は十分に、本当は準備する期間だったはずなので、皆様お忙しい

でしょうけれども、必ずやってください。この協議会の最初のときから、道民参加型組織の重要性を、ずっと言ってきたので、ぜひとも具体的にやっていただきたいと、重ねて要望したいと思います。

《意見 3 内部評価と年度計画の項目の対応》

大原会長：内部評価の項目と年度計画の項目とが、対応していない点がわかりにくいです。評価が「A」のところは今までどおりやればいい、「B」のところは頑張らなければならぬとなるのが、内部評価の意味だと思うのですけれども、現状はそれがわかりにくいと改めて思いました。ですので、5ヶ年の中期目標・計画期が過ぎてからで良いと思いますけれども、内部評価の項目と年度計画の項目が一致していたほうが、「今年は力を入れるところ」「入れないところ」が、誰にでもわかる形になると思います。

《質疑応答 5 平成 30 年度事業の整理》

大原会長：年度計画ですけれども、おそらく、北海道 150 年の関連事業が非常に大きな、目標のひとつになると思うのですけれども、特に来年度新しくやることに対して、新しいことをやるということは仕事が多くなりますので、止めることは何かございますか？ だいたい、今までどおり、継続なのでしょうか。

小川学芸副館長：来年度、北海道 150 年に関わって当館が行う大きな事業としては、特別展が松浦武四郎に関するものです。おそらく、これに関わって、いろいろな形で当館の職員が各地の 150 年事業やそれに関連するものに協力したり、講師として講演をしに行くことが増えると考えています。特に「これをやるから、こちらを削る」ということは、あまり考えていません。むしろ、先ほど申しましたように、この間の宿題になっている事業について、もう 4 年目という時期になってきておりますので、そこについて始めます。それから、中核的博物館づくりに関わって、主に自然史系博物館の全国組織的な活動を目指して、国立科学博物館が自然史に関わる資料を活用する事業を実施するために、少し大きな助成金を獲っています。これに北海道博物館が、北海道の中核的博物館ということで参加を誘っていただきまして、道内の市町村の博物館を含めた、自然史に関する展示や資料の巡回を担う事業を展開することが、来年度から本格化します。これにうまく関わっていく形ができれば、中核的博物館としての役割を果たすことについても、今までよりはっきりしたことができるかと考えております。

舟山学芸部長：廃止した事業はないのですけれども、若干整理しているところはございます。資料 3 の 19 ページ、来年度の「特別展・企画テーマ展計画」ですけれども、第 4 回特別展と第 11 回から 13 回の企画テーマ展を開催する予定になっています。これまでの計画案では、特別展・企画テーマ展に加えて「蔵出し展」というものを設けていました。この蔵出し展は、具体的には新着資料展や収蔵資料を紹介するという形ですけれども、その蔵出し展を企画テーマ展の枠の中に入れて、整理しております。

大原会長：ありがとうございます。

《意見4 「平成30年度年度計画」の記述（1） 資料の収集》

児島委員：今まで出ましたご意見と関連するところもありますけれども、概要として年度計画を出していただいたので、質問をさせていただきます。実績報告書といろいろ突き合わせると、疑問が解消されるところも、もしかしたらあると思うのですけれども、教えていただければと思います。5月に行われる予定の協議会で本格的な年度計画が出てくると思うのですけれども、そのときにわかりやすくなっていることを期待してお聞きます。

資料3の1ページ目、「資料の収集・保存」の「（1）資料の収集」ですけれども、コレクションとして受け入れたものと、そうではないものがあるのですよね？たとえば、2番目の「収集した資料についての調査を実施し」云々というのは、これはコレクションではないものでしょうか？その後、コレクションの受入のいろいろな作業を再整備するとか検討するとかあるのですけれども、コレクションと個別の資料とで、年度計画に書かれている順番がいろいろになっているのではないかと思います。もし2番目がコレクションについてではなかったら、記載の順番を入れ替えておくのが良いかなと思います。

《意見5 「平成30年度年度計画」の記述（2） 資料環境の維持》

児島委員：「（3）資料保存環境の維持」というのがあって、判断数値に「連絡会議の開催数」がありますが、その連絡会議は「（2）収蔵機能の強化」に関連する、収蔵のスペースを整理して広げることにについての会議ではないのですよね？ そうだとすると、「（2）収蔵機能の強化」の判断数値は「一元化後の資料登録件数」だけですけれども、「機能の強化」のための会議の回数は判断基準に要らないのでしょうか。会議の結果、受入件数が増えることにつながるとしたら、「一元化後の資料登録件数」だけでは、収蔵機能の強化についての判断数値は、どうするのかなというところです。

《意見6 「平成30年度年度計画」の記述（3） 道民参加型の企画展示》

児島委員：道民参加型組織ですけれども、資料3の2ページ「（2）企画展示の開催」に、「道民参加型の企画展示」と書いてあります。具体的にはどういうことですか。組織をつくることは「実現する」と、先ほど説明がありましたが。現在の「アンモナイト」がそうだと思うのですけれども、他に、何か具体的に道民参加型の企画展示が考えられているのでしょうか。

《意見7 「平成30年度年度計画」の記述（4） 企画テーマ展》

児島委員：資料3の3ページ目、「イ 企画展示の開催」、これはアイヌ民族文化研究センターの関係ですけれども、資料3の最後の特別展・企画テーマ展の計画にある、第13回企画テーマ展「アイヌ民族資料を守り伝える力」は、アイヌ文化に関する展示事業に入らなくて

よろしいのですか？

事務局：入りません。

児島委員：いいのですか。入っていないので、疑問に思いました。

《意見 8 「平成 30 年度年度計画」の記述（５） 調査研究の重点化》

児島委員：4 ページ目に「（２）アイヌ文化に関わる調査研究の重点化」とあります。「重点化」とは何でしょうか。アイヌ文化に関わる調査研究を重点化するという意味なのか、調査研究の中の何かが重点化されるのか、意味がよくわかりません。それから、「ア 調査研究事業」の３つめの「ロシア・サハリン州」云々というところですけども、「博物館における先住民族文化の研究・展示・資料のあり方」とありますが、その「研究・展示のあり方」、「資料のあり方」の「あり方」という意味がよくわかりません。その下にも「課題のあり方を検討する」とありますけれども、「あり方」とは自然の存在の仕方なので、「課題のあり方」「資料のあり方」という意味をもう少し、はっきりさせていただきたいと思いました。

《意見 9 「平成 30 年度年度計画」の記述（６） 普及事業の効果》

児島委員：6 ページ目に「（４）アイヌ文化に関わる教育普及事業」が出てきて、博物館で行う講演会や関連事業について「内容や効果を分析」とあります。この「効果」とは何のことを言っているのでしょうか。関連事業の「効果」とは、何を指しているのか、よくわかりません。

《意見 10 「平成 30 年度年度計画」の記述（７） 道民参加型組織》

児島委員：道民参加型組織が 7 ページ目にも出てきますけれども、ここには「調査研究事業」も入るのでしょうか。道民の方たちに協力してもらおうとあったのですけれども。その道民参加型の事業については、企画展示や関連事業、調査研究にも、地域で協力してもらおうなど、いろいろな「道民参加型」が出てくるのですけれども、そういう様々な道民参加型事業は、その都度その都度で、それぞれ組織を集めて、「これに参加してもらえますか」というように募集してバラバラにやるのでしょうか。それでは、とても効率が悪そうなので、組織を作ってやるのか、整理をして進めてほしいと思います。

《意見 11 「平成 30 年度年度計画」の記述（８） プロモーションビデオの活用》

児島委員：先ほど宇佐美委員がおっしゃった「広報」です。8 ページの冒頭で、プロモーションビデオの活用について、「様々な機会・場所で」と書いてありますけれど、この「場所」は、「道外」を考えていらっしゃるかどうか。私は時々申し上げているのですけれど、道外に向かって「道立の博物館」というアピールが少ないと思っています。道民のための道立博物館ということは、それはよくわかっていますけれど、外国人も含めて、道外に向けても何かやってもいいのではないかと思います。

《質疑応答6 資料写真の提供について》

児島委員：10 ページ（3）の「判断数値」です。ひとつは「写真の提供件数」ですが、たとえば、この博物館で所蔵されている民具の「写真を掲載させてほしい」と依頼があった場合、写真の提供は無料ですか？

右代学芸主幹：無料です。

児島委員：無料ですか。「同じようなものだったら、無料のところから借りてきて」と出版社から言われるので、他にもそのお貸しする写真の権利関係などがすごくはっきりしていて、貸し出しやすい状況になっているかどうかも重要ですね。それは無料だということでしたので、わかりました。

《質疑応答7 レファレンスの内容とカウント方法》

児島委員：同じ10 ページの「（3）道民の知りたい気持ちへの支援」では、「レファレンス件数」が「判断数値」になっていますけれど、レファレンスの内容とは、いったいどういうことでしょうか。「道民の『知りたい』気持ちへの支援」とある、「道民の『知りたい』気持ち」に関連しているレファレンスなのか、それとも極めて専門的なことなのか、ただの「レファレンス件数」の数値だけではわからないことがあるのではないかと思います。その内容についての分析、せめて分類があったら良いと思いました。

次の協議会のときには、もっと資料がわかりやすくなっていたら良いと思います。よろしくお願いします。

大原会長：レファレンス件数は、具体的にどういうカウントなのでしょう？

小川学芸副館長：外部の方から、電話あるいは来館されてのお問い合わせなどがあったときに、それを受けた職員が1 件ごとに記録していく方法で数えています。忙しくて記録する時間がないと件数が落ちるので、おそらく実際にお答えしている件数より、記録に残っている数がかなり少なめかと認識しています。中身は、正直なところ、いろいろです。本当に「なるほど、いいこと訊いてくださった」ということもあれば、最近、救急車を呼ぶのが増えて困っているというような内容もあれば、本当に「今日の夕方放送するテレビ番組のここを埋めたい」というものもあり、かなり様々な内容です。これを数的に示すのは少し難しいかと思っています。たとえば、「言語が何件」「テレビから何件」という形で示すことは可能ですが、中身として「道民の『知りたい』気持ち」に込めているものと、そうではないものをどこで分けるか、少し難しいところがあります。こういう協議会に実績をお出しするとなると、どうしてもトータルの数字でお出しして、ある程度、口頭の補足で「こういったものが増えてきているのは喜ばしい傾向だ」ということが言えるかどうかかと考えています。

佐々木委員：今のレファレンスに関してです。数字を見まして、目標値と実績値の差が大きいので、ひょっとしたら目標値そのものに何か問題があるのではないかという気がしたのですが、この目標値はどういうことを基準にして、設定されているのでしょうか？

小川学芸副館長：実際に受けている電話の件数の感覚と、たとえば旧道立アイヌ民族文化研究センターのときは、アイヌ文化関係だけで、だいたい年間 120 から 150 件くらいあったので、北海道博物館として 5 分野を想定して、何年分を掛けてという形で、この数字としました。それから、目標値と実績値との差につきましては先ほど申し上げましたように、電話がかかって来ると、そこで記録を取れば良いのですが、お客様対応がずっと続くと、「今日 1 日働いて、1 日の終わりに記録票をつけて」とはなかなかならないので、記録の取り方が追いつかないところが実態かと見ています。

佐々木委員：私が昔いた、大阪の「民博」、国立民族学博物館は、2004 年に法人化されて以来、レファレンス機能をかなり強化しました。何系統もありまして、一番多いのは、インフォメーションの人たち、千里文化財団の職員なのですけれども、そのひとたちが毎日、どういう問い合わせがあって、どういう対応をしたかという記録をつけています。それから、メールで来る問い合わせもあります。そういうのは広報などの担当を直接設けまして、すべてそこに集中するようにして、そのひとが交通整理をしています。そのひとのもとに記録が残っていきまして、毎月、「こういう問い合わせがありました」という記録を財団のものとあわせて集計して、エクセルで一覧表を出します。そうすると、正確に数えたわけではないですけれども、エクセルで画面をスクロールしないといけなくらいの件数が、毎月出て来ます。年間にすると、かなりの件数が来ているということです。それに対して、教員の対応は、10 件に 1 回か 20 件に 1 回ぐらい。教員のところにも「これ、どうしますか」と割り振りがあって、対応することがあります。北海道博物館は、そういう機能がメインではないので、特別は要らないのでしょうか、民博の場合は「共同利用機関」と名乗っているもので、あらゆる外からの要望に対応しようということで、このようなものをつくっています。ですから、北海道博物館で、お客様対応とするのか、それとも共同利用と考えるのかという考え方の違いですけれども、どういう対応をされるのかによって、専門の職員をつけなければいけない可能性もありますので、そのあたりも少しと考慮に入れられてはと思いました。

《質疑応答 8 利用者数変動の分析》

佐々木委員：気になったのは、実績報告書の 10 ページの総括評価番号 3 で、それぞれの目標値と実際の値の違いです。たとえばイベント参加者に関しては、目標値 6000 人に対して実績は 1 万 3 000 人。2 倍以上の人が博物館に来られている。それに対して、はっけん広場の利用に関しては、2 万 6000 人に対して若干達成できないことになるだろうし、ホームページのアクセスについても若干足りない感じになっている。それから総合展示のお客様の数も漸減傾向にある。これに関して、「分析が必要」と書いてあるのですが、その分析結果を知りたいです。ご参考までに教えていただけたらと思います。

舟山学芸部長：イベントはおおよそ倍以上の実績数になっていますけれども、そのひとつの要因は、「北のミュージアム活性化実行委員会」で、他館と連携という形で道内の 6 地区の博物館に関わっていただいて、「北の みゆぜふえす」というイベントを実施しました。その参

加者が大幅に多いことが、まずひとつです。それから、全般的には、佐々木委員がおっしゃったように、入場者数が減っているように、各講演会・講座等の参加者数も、減っています。目標値は、たとえば80人の参加申し込みに対して、最低限80%の参加者を見込んで設定していました。リニューアル初年度・次年度は達成しているのですけれども、29年度については、80%を割る事業もありました。けれども、その「北の みゅぜふえす」などで押し上げて、全体的には、このような数字になったところでございます。

《質疑応答9 総合展示のリニューアル計画》

佐々木委員：常設展示を総合展示という名前に変えて、展示替えを前提とする展示に変わったのですが、その総合展示の、たとえば中期目標期間における、いつ、どういう展示に変えていくかという展示リニューアルの計画は、立てていらっしゃるのか、伺えればと思います。

舟山学芸部長：総合展示のリニューアル計画ですけれども、短期でできる部分と、中期でできる部分、また大がかりにする部分もあると思います。現状では、総合展示内の展示替えは、クローズアップ展示を中心に実施してきましたけれども、来館者数の減少に歯止めをかける程には成果が出ていない状況です。減少に歯止めをかける、あるいは増加を目指して、計画を立てようとして、様々な来館者アンケートだけではなくて、館職員からの意見も含めて、どういった展示替えをしていくのがいいのかを、検討しているところでございます。中長期の前に、短期・中期で考えようとしているところです。

大原会長：ありがとうございます。予定された時間が近づいてきましたけれども、ご質問はよろしいでしょうか。

全委員：なし。

大原会長：それでは、ただいま、いろいろなご意見・ご指摘をいただきました点につきましては、事務局で整理をしていただいて、今後の博物館運営に反映させるよう、よろしくお願いいたします。

議題（4）報告事項3 平成30年度 北海道立総合博物館協議会 スケジュール

大原会長：それでは、議題4に移りたいと思います。報告事項3「平成30年度 北海道立総合博物館協議会のスケジュールについて」。事務局から説明をお願いいたします。

右代学芸主幹：資料4を見ていただきたいと思います。

〈以下、資料4に基づき、平成30年度北海道立総合博物館協議会のスケジュールについて説明を行う〉

大原会長：はい、ただいまの事務局からの説明について、何かございますでしょうか？ よろしいですか？

全委員：了解。

4 その他

大原会長：続いて「その他」ですが、皆様から何かございますでしょうか？

石森館長：ガバナンスという言葉も出ておりましたので、今日は、主として学芸副館長・学芸部長がお答えいたしました。館長として責任がありますので最後に少しお話をさせていただきます。

皆様方から、たいへん重要・貴重な厳しいご指摘をいただきました。1つは、総合展示の入館者数において、北海道博物館がスタートしました2015年度は15万人、2016年度は11万人、そして2017年度は今のところ8万人ぐらいですので、3年間でずっと低下しております。私どもも結果がすべてでもありますので、これは非常に大きな問題と受け止めております。

もう1点重要な点は、道民参加型組織であります。これも最初から私も唱えたところでございますけれども、現実には、まだ明確な形ができていない。これについては、本当にそういう形を取らないと、北海道立の博物館としては成り立ちませんので、きちんと実行に踏み込んでいかざるを得ないと認識しているところでございます。

それから、3番目の重要なご指摘は、学芸員の質の問題です。この4月1日に新たに3人の新しい学芸員を迎えることで、約30人いる学芸員・研究職員のうちの3分の1くらいが、2015年に北海道博物館が誕生してから採用となった職員になります。小川学芸副館長をはじめ、「よりよく育ってほしい」という思いもありまして、新年度の新採用職員にはきちんとしたチューターをつけ、よりよく北海道博物館の役割・使命を十分に理解し、そして本当に道民に愛されるような博物館運営に携わってほしいと考えております。

各委員からは、本当に的確に、鋭く問題点をご指摘いただきまして、まだまだ至らないことばかりではございますけれども、我々幹部職員としても、そのあたりは、痛いほど十分に認識しております。3歩前進・2歩後退の繰り返しもございますけれども、1歩ずつ進めるべき歩は進めているところでもございます。

内部評価の点検だけではなくて、外部評価という形でも評価いただいていることを、活かしていかなければ、委員の皆様方に対しても、道民に対しても申し訳が立ちません。私も老骨に鞭を打つ形で、館長に留まる間は役割を果たしていくつもりでございますので、今後とも厳しいご意見をいただくことによって、北海道博物館をより良くさせていただこうと思っておりますので、今後とも、よろしくご指導賜りますように、お願いをいたします。本日は、本当にありがとうございました。

5 閉会

大原会長：それでは、これをもって、本日の議題は終了となります。本日の協議会は、これを持ちまして終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。